

## 問題と目的

### ・問題

気功は、中国から発祥の治療・養生法であり、身体的技法でもある。気功の練習において、「気」の感覚は、理論と実践の両方においても非常に重要な役割を果たしている。「気」の物質性や治療効果に関しては、世界中の科学者によって数多く研究され、赤外線や電磁波などの物理現象だといった仮説が続々発表されたが、最終的には「未知のエネルギー」、「暗示効果」などという結論に留まっている。つまり、「気」は、自然科学的アプローチの研究においても曖昧な結論にしか至らない、ブラックボックスのような、手を加えられない存在になっているといえる。そのほかに、中医学、中国古代哲学、および東洋的身体論の文脈で、「気」の哲学的意味に対する考察も少なくないが、あくまでも文化的文脈のみで「気」のメカニズムを説明している。気功に関する民族誌では、「気」を感じるのが肝要であるということが語られ、また人々は想像力を駆使して気功の要領を記憶する記述もあるが(Chen 2003; Palmer 2007; Hsu 1999)、「気」を感じとる能力や想像力が、いかに実践によって身につけるかについての研究は不足している。

## フィールドワーク

### ・第1回の渡航

- ① 上海気功研究所の研究員の協力のもとで、沈の気功教室で助手という立場で、参与観察や気功先生、学生たちへの聞き取りと行った。
- ② 上海気功研究所の複数の研究員の気功教室にも、フィールドワークを実施し、グループインタビューを実施した。
- ③ 中国の気功現状を把握するため、上海気功研究所の所長と副所長、李氏と許氏への聞き取り調査を実施した。

### ・第2回の渡航

- ① 上海中医薬大学の図書館で「未病・治未病」についての文献・資料を調べて、収集した。
- ② 上海気功研究所の気功教室で引き続いてフィールドワークをし、病気、身体・精神的苦痛などの側面から、データを収集した。
- ③ 中国唯一の気功病院・気功療法の発祥地である河北省気功医院で短期滞在し、気功療法・効果について病院の副院長、病院の患者たちにインタビューを実施した。
- ④ 上海で開催した第15回国際気功シンポジウムに参加し、中国気功界の有名人物と交流した。

## 結果と考察

### ・「気」と身体経験

1. 「気」は、気功の実践現場での自分と他者の身体、あるいは環境に向ける注意によって生じた身体感覚と感情的変化によって身体化されることを明らかにした。
2. 「経絡」、「経穴」など普段は感じられず見えないものが、気功によって生じた「フィーリング」と想像力の相互作用によって、具体的な位置あるいは、流れのルートなどの知識として記憶された。それは、「気」を感じる基盤となっていると考えられる。
3. 「気」は、恒常的に感じられるものではない。実践からエンスキルメントされた「フィーリング」と想像力、記憶との相互作用が深まることによって、「気」に対する感覚は量的変化のみならず質的にも変化が生じることもあることがわかった。

### ・渡航の目的

第一回目の渡航目的は、気功現場での参与観察と聞き取り調査によって、気功という身体的実践を通じて「気」が感じられるプロセスに着目し、いかに感覚、想像力と記憶が「気を感じる」のために働くのかを明らかにすることを目的とする。つまり、身体経験という側面から、気功療法の中核である「気」の主体的経験を詳しく記述し、検討することである。

第二回目の渡航目的は、「治療」という側面から、気功を考察することである。具体的に、「未病」・「治未病」という徐々に広がっている東洋医学の概念を注目し、気功の実践によって、「未病」を**発見から治療・治癒までのプロセス**を記述し、分析を行うことである。



### ・身に付けた「未病」と「治未病」

1. 気功実践の中で、「未病」・「治未病」は固定的な概念や定義はなく、気功の動きによって生じたダイナミックな身体感覚によって成立するものである。
2. 自分の身体と他人の身体に注意を向かうことで、身体感覚で「未病」を見つけるようになり、「未病」の変化を捉えることによって、「治未病」を実現する。
3. 「未病」は身体感覚によって成立し、気功によって「治未病」の「治」も、終わりの無い実践になる。
4. 「気」の感覚を身に付けることは、「治未病」の実践にとって不可欠なことだけでなく、個人個人の「未病」・「治未病」文化を構築している。
5. 気功によって生じた身体経験は、「気功による治未病」の表象ではなく、逆に、身体経験があるこそ「治未病」を構築する。